

出歩ける内は写真三昧。その後は珈琲でも嗜みながら、現役時代に見逃した映画をアマプラかネットフリーで漁りましょか

湯河原〈ゆうゆうの里〉 榊原裕一様(70歳) 令和3年11月 一人入居

定年前に心配した「喪失感」は杞憂に。やり残したことがある

大学までは大阪、その大半を豊中市で過ごしました。中学生の頃には、前の大阪万博が開催されていました。会場が豊中の自宅から近くで何度も見学に行きましたね。理系の大学に進み、修士課程終了後は、東京にある公的セクターで

仕事をしておりました。湯河原に来る前は、岐阜大学でお世話になりました、この〈ゆうゆうの里〉に移住後も二年ほど公益財団の役員を務め、昨年の6月末に退職致しました。

現役時代は仕事で忙殺される毎日でしたが、仕事以外ではロードバイクに乗り佐渡島一周、琵琶湖一周など、各地を17年間で12・3万キロほど踏破しました。し

かし、流石にいつまでも走れるものではないなど解っていましたので、体力に合わせて次は何をやるか模索するようになりました。そうして10年前の定年退職を迎えたのですが、「喪失感に苛まれるのではないか」との事前の心配も杞憂に終わり、逆に、完全燃焼していなかつたのか、まだやり残していることがあるのではないかと思うようになりました。



思い描いた第二の人生のプラットフォーム。早期入居が実現

両親は別の老人ホームに入居しており、15年間様子を見て来ましたので、ホームの大体のイメージは有りました。「第二の人生のプラットフォーム」とも言うべきものかと。両親からは、老人ホームの長所は「生活が楽になる」、「自由時間が持てる」、「何か不便なことが起きた時に助けがある」、「医師がそばにいる安心感ある」と、短所は「人間関係が大変」とも聞いており、老人ホームの選択に違和感は有りませんでした。

ある日、次男家族と食事をしていると、私の所有するマンションの売却が話題に。不動産を取引、



第73回二科会写真部公募展入選作品『華麗に』

自由時間
違ひありません。
真を始めようと
望遠レンズを
買ったのです
が、コロナで
イベントが全
て中止になり、
近隣の野鳥を
撮影していく
ました。入居し
て、写真の勉
強をすること
から始めてい
ます。これま
で出来なかつ

自由時間が増えました
たかった写真も
やり

思ひ描いた第二の人生のプラットフォーム。早期入居が実現

両親は別の老人ホームに入居しており、15年間様子を見て来ましたので、ホームの大体のイメージは有りました。「第二の人生のプラットフォーム」とも言うべきものかと。両親からは、老人ホームの長所は「生活が楽になる」、「自由時間が持てる」、「何か不便なことが起きた時に助けがある」「医師がそばにいる安心感ある」と、短所は「人間関係が大変」とも聞いており、老人ホームの選択に違

の場で売却を即決。すぐに希望価格で契約が成立しました。入居年齢は、両親のホームのよう70才とばかり思っていたので、70才迄のあと3年足らずをどうするかが問題になりました。後から施設によつて入居年齢が異なることを知り、65才で入居が可能な施設を探して、湯河原「ゆうゆうの里」に巡り合いました。おかげで66歳の早期入居が実現しました。ですから一番大きな決め手は入居年齢でした。写真サークルがあること、職員の定着率の高さも高評価でした。

思いもよらなかつた「珈琲サロン」の立ち上げ、集う人達の笑顔が嬉しい

た地域社会との接点を持ちたい」と
今は、湯河原写真連盟の活動と湯
河原町観光ボランティアの活動を
しています。外に出て行ける間は
できるだけ撮影に出かけようと
思っています。昨年は、「湯河原
の湯かけ祭り」の写真で、初めて
神奈川二科に入選し、今年は二科
本展に入選しました。写真は非日常
常性を撮るもの、時間を止めるど
う見えるかということに興味を
持つて取り組んでいます。

「コーヒー・ルンバ」ではあります
せんが、コーヒーは人を幸せにする
飲み物です。少しでも多くの人に
に来ていただきればと思っており
ます。私は時間があればお話ししま
すが、だいたいは黙々と珈琲を淹
れ続けています。



「珈琲サロン」で珈琲を淹れる榎原様